銅管を建築意匠材に！
「山」を彷彿させる寺院
松栄山仙行寺誕生

緑豊かな「山」の完成

窓を開放すると緑の向こうに銅管が覗く

コーナーの銅管接合部

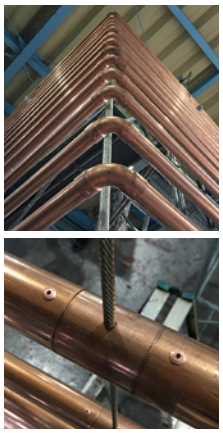
東京ＪＲ池袋駅から徒歩5分足らず、交通至便の場所に日蓮宗松栄山仙行寺はある。この6月に完成した同寺は、「山」として生まれ変わった。

同寺の建築設計・監理に当った株式会社マウントフジアーキテクツスタジオ　主宰（芝浦工業大学教授）原田真宏氏は言われる。

――日本人には、古くから「山」の持つ自然の力に対し、畏怖の念とも言える感情があります。寺院に〝山号〟があるのも同様の意味でしょう。山に祈ることは、仏に祈ることなのです。それなら、都心に「山」を出現させよう、「山」のような寺院を作ろう。それが設計の第一歩でした。

垂直に立つ寺院の壁面を「山」に模し、古くからわが国の城壁に見られるあの独特の曲線〝カテナリーカーブ〟を取り入れました。

このカーブを創り出すのに〝銅管〟に着目。コンクリートの壁面を上下約250㎜間隔で銅管で水平に取り囲み、下部に行くほど外側に裾を広げ、少しずつ広がっていく。変形コの字型の102本の銅管でこのカーブを作り上げました。


工場で仮組みされる銅管

さらに「山」のイメージを膨らませるため、各フロアの外側にテラスを設け、植栽を施し、屋上にも緑豊かな庭園を設け、「山」を表現しました。植栽デザイナーを入れ、もともとこの地域に存在していた植生を取り入れる工夫をしています。

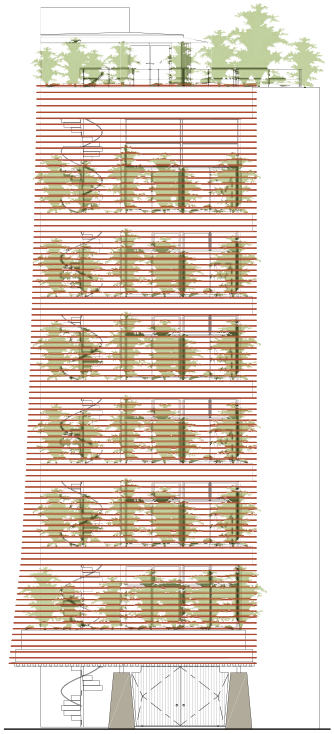
銅管を使用したのは、あくまで〝自然〟を創出したかったから。銅は時を経るごとにゆっくり、自然に色が変わっていき、緑青が吹くと、そこで安定します。裸のままで使っても自然の変化を受け入れてくれる材料として銅管を選びました。

人は生まれ、育ち、そして死んでいく。そんな人生の変化をこの寺院で表現したかったのです――

ここで使用された銅管は直径41・28㎜、厚さ1・23㎜。直管を銅管継手で接合、上下のガセットプレートからワイヤを張り、これで銅管を貫通固定している。

建物を下から見上げると銅管の間からさまざまな植栽が顔をのぞかせ、間もなくやって来る秋を静かに待っている。

マウント・カパーの完成である。


南正門立面図